



50

号記念エッセイ

近代日本の痕跡としての「海外神社」 —神社班の視点と手法—

後田多 敦（非文字資料研究センター 研究員）

はじめに

私は「近現代日本の祭祀空間と海外神社」班を通して、非文字資料研究センター（以下、非文字センター）での活動に関わっている。「神社班」と呼ばれているこの班の視点や関心をキーワードであれば、「海外神社」「祭祀空間」「帝国日本」「跡地」「景観」「再編」などとなるだろうか。そして、その背景には近代日本の戦争や植民地支配などのテーマが広がっている。「日本の外」に残る「神社跡」という痕跡を通して、近代日本と周縁との関係を考える挑戦的な試みだといっていいだろう。

神社班は、2003年にスタートした神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」第3班3グループ（景観に刻印された人間の諸活動と災害痕跡）「海外神社跡地調査」チーム、さらに中島三千男による1990年度からの調査研究に遡る。それが非文字センター第二期（2011～2013年）の共同研究「海外神社跡地から見た景観の持続と変容」（研究班代表・津田良樹）となり、第三期（2014～2016年）「海外神社跡地のその後」（研究班代表・中島三千男）と続き、その後第四期・第五期を経て今期となる。私が加えてもらったのは、第三期途中からだ。

加わった当初は、神社班の具体的な取り組みを知らなかっただけでなく、自分の軸足も定められずにいたというのが正直なところだ。それでも、近代日本の宗教政策や「境界」に関心があり、非文字資料というアプローチにも興味をもっていた。このような事情で、当初からの全像が見えているわけではないが、遅れて参加したことで多くを学ぶことができた立場から、神社班の研究について話題を提供したい。

海外神社と琉球の御嶽

第二期研究班代表の津田良樹は建築史を専門とし、具体的な建築物としての古民家の研究などを行っている。第三期研究班代表の中島三千男は、天皇の代わりや宗教の研究者。中島はCOEプログラム以前、すでに6地域45社を調査していた。メンバーは入れ替わりつつ、神道や海外神社などの研究者のほか写真家や若手研究者もいる。「日本の外」を対象とするが、「神社」という日

本のシステムからのアプローチとなる。国外の神社跡地などの調査を行い、事例を積み上げるスタイルである。その成果が各論文のほか、「海外神社（跡地）に関するデータベース」や『海外神社跡地の景観変容—さまざまな現在』（中島三千男著、御茶の水書房、2013年）、『「神国」の残影—海外神社跡地写真記録』（稲宮康人、中島三千男著、国書刊行会、2019年）などの著作、さらには数回の展示会となっている。神社班の手法を整えた中島や津田が定年退職し、第四期から私が班代表を引き継ぐことになった。

私は琉球の国家祭祀を研究テーマの一つとし、特に近代日本の影響でどのように変容したかに関心がある。王政復古大号令（慶応3年12月9日＝1868年1月3日）によって発足した天皇親政の近代日本は、様々な方法で周辺諸国・地域を支配下に置いていく。近代日本が行った二つの国家併合のうち、一例が琉球併合である。琉球国は「琉球処分」によって1879年、日本に併合され沖縄県として組み込まれた。その過程やその後、琉球の国家祭祀がどのように改変されたのか、そしてその意味は何かというのが、私の基本的な問いだ。

日本は編入した沖縄の「日本・国内化」を進め、その手段の一つとして神社を用いた。事例を挙げれば、琉球の国家祭祀空間だった御嶽を神社に改変しようとした。琉球国の王城だった首里城内にも神社を創設し、「正殿」を拝殿としたのである。琉球国時代の王城は祭祀空間でもあった。琉球の中心的祭祀空間をも神社に組み替え、「日本の空間」に改変しようとしたのである。

「琉球処分」後の日本の沖縄政策を踏まえると、御嶽から、つまりは琉球側から考えるか、あるいは神社側から考えるかは、近代沖縄の宗教・信仰と向き合う際の根本的な問題である。改変される側に関心を持つのか、改変した（する）側から研究するのかという基本的な相違でもある。そのため、琉球の民族宗教に関係する御嶽や火の神などと、外来宗教・信仰の仏教や神社についての研究の多くは、それぞれの側で取り組まれてきた。

首里城という空間の再編

研究班代表を引き継いだ際、「海外神社」では自分の

テーマから遠いだけでなく、手に負えないこともあり、先行の視点や手法に学びつつ、沖縄をフィールドに〈祭祀空間の再編〉を柱にすることにした。というよりも、これなら接点があり、なんとか関われそうだということだった。そして、「近代沖縄における祭祀再編と神社」(第四期)と『帝国日本』境界の祭祀再編と海外神社」(第五期)に取り組むことになった。

それでも、海外神社を視野に入れることで、沖縄の位置は興味深い論点を浮上させる。日本の「境界」をどう考えるか。沖縄は「海外」に含まれるのか、含まれないのか。沖縄の位置づけ自体から議論となる。琉球国時代にも日本系神社は存在するが、沖縄の位置づけによっては、近代以降に沖縄で創設された神社の意味が変わってくる。近代以降、沖縄に設置された神社は、海外神社なのか、議論が分かれるところだろう。そこで、第四期では沖縄側の祭祀や御嶽の研究者、沖縄の神社の研究者を招いて議論の場をつくるところから始まった。

かつての王城・首里城は、国王の居所や政治の場というだけではなく、国家儀礼や外交のための空間であり、御嶽の存在する祭祀空間でもあった。その王城は1879(明治12)年、「琉球処分」で日本政府に接收され、日本軍が駐屯した。その後、大正末期に沖縄神社(後に県社)が創設され、「正殿」は拝殿とされた。そして、1928(昭和3)年から拝殿として修復された(昭和修復)。城内地下には沖縄守備軍・第32軍司令部壕が設置されたこともあり、1945年の沖縄戦で破壊された。

戦後の米国統治下では跡地に琉球大学が置かれたが、「復帰」記念事業の一環として、1992年に正殿から復元公開された(平成復元)。この平成復元では「1712年に再建され、1925年に国宝指定された正殿」を復元の対象とした。つまり、琉球国最後の正殿で、昭和修復以前の姿だ。城内全域の復元が2019年に完了したが、同年10月31日未明に正殿から失火して正殿などが焼失した。現在、再建が進められている。

首里城正殿などの焼失と再建が眼前で進行することで、沖縄神社との関係だけでなく、沖縄の置かれた位置まで明確に可視化されることになった。沖縄と、台湾や朝鮮半島、旧満州国、あるいは南洋の島々など、大日本帝国の統治や支配下にあった地域との差異も明確になった。一言で表現すれば、それは過去の出来事ではなく、現在進行形だということである。そして、先行の神社班からの問いと成果が重層化され、立体的に見えてきた。

また、首里城正殿などの焼失は、非文字資料の重要性をも確認する機会になった。

象徴的な事例の一つが、正殿正面石階段上り口両側の大龍柱の向き問題である。平成復元の大龍柱は相対向きに設置されたが、本来は正面向きだとの異論がだされていた。大龍柱は、日本軍が城内に駐屯していた時期にへし折られるなど、高さが改変されていた。さらに「正殿」が沖縄神社拝殿として読み替えられていた時期、修

復時に向きを正面から相対へ改変された。首里城という象徴的な空間の争奪であり、意味の読みかえ、さらには具体的な造形物(大龍柱)改変の事例である。

大龍柱の向き問題に対し、非文字センターでの活動成果として、フランスに現存する最古の正殿写真(1877年撮影)を提示することができた。最古写真やそれを基にした図版については、熊谷謙介研究員の協力を得るなど、非文字センターの他研究班との連携も力となった。その写真では、大龍柱は正面向きだった。それでも今回の再建は相対向きの方針である。いずれにしても、近代における首里城や沖縄神社をめぐる問題が、現在にも影響を与えている事例だといっていいたいだろう。

おわりに

琉球社会は東アジアのなかで、小国ながら一国を形成し維持していたが、独自の文字を持たなかった。それ故に、書き言葉として漢文や日本の文字などを用いていた。それでも、独自性の強い文化を培ってきた。文字資料が重要なことは前提だが、琉球文化の独自性は、非文字資料のなかにこそ強く刻まれているといっていいたいだろう。文字化されなかった歴史や文化、個性などを知ろうとするなら、芸能や祭祀、儀礼、造形物、そして文様、写真・図版など、非文字資料の世界をより活用する必要がある。大龍柱の向き議論の背景には、非文字資料への向き合い方の差もあるといっていいたい。

海外神社を支えた大日本帝国の実像、特に拡大した地域での実像は、どこまで明らかにされてきたのか。組み込まれ支配された側が受けた問題などはどうだろうか。侵略や支配の痕跡の一つが、海外神社跡地として「刻印」されている。人間の営みの痕跡としての非文字資料から、事実を、あるいはその背景をどのように読み取ることができるか。空間の争奪や文化の改変という場を、奪われた側をも主体として考えるなら、非文字資料とその蓄積(データベース)はより重要になるだろう。

軸足の定まらないままに参加した神社班だったが、私にとっては研究手法を広げることができただけでなく、琉球史や日本近現代史への理解を深める契機となった。



神社班の合同調査で訪れた琉球八社の一つとされた識名宮。写真は境内にある洞窟の入り口(2017年9月、沖縄・那覇市、後田多撮影)